

■ 高稲荷神社 . . .



「稲荷」とは、文字通り稲作神・農業神のことで、江戸時代中期に、最も広く人々の信仰を受けました。このように普及した理由の1つが、田の神の使いとしての狐信仰と、稲荷神の使いが狐であるとの信仰が結びついたからとも言われています。つまり、狐という身近な動物がより一層の親しみと怖れとを人々にもたらしたからではないかと思われます。

さて、今回紹介するのは、練馬百景の1つにも掲げられている「高稲荷神社（公園）」ですが、残念ながら詳細な由緒などが分かっていません。練馬区史に、

南町3丁目の高稲荷は、石神井川に臨んだ台地上の景勝の地であるが、その下は昔、大きな沼になっていた。その頃、そこには主の大蛇が住んでいた。練馬村のある若者が、この大蛇に見込まれ、ついに沼の中に引き入れられてしまった。その霊を慰めるために祀ったのが、高稲荷だとも言われている。

という文が載せられている程度です。

公園側からの急な階段には、1柱の木造鳥居と2柱の石造鳥居とが重なって立っており、1番上の鳥居には「嘉永六丑年二月初午」（1853年）と記されています。そして「狐型の狛犬」が一對蹲踞（そんきょ）の姿勢で鎮座し、左脇に「水盤」を置き、社殿へと続きます。社殿は昭和55年（1980年）に改築された、大変りっぱなものですが、興味を引くのは、昭和6年（1931年）に改築されたことを記した記念碑です。と言いますのは、当時「世界恐慌」の真っ只中！社殿を改築するゆとりなど当地の農民にあったのだろうかという点です。むしろ「おらがお稲荷様にすがって、この不景気を抜け出したい」との強い願いがそうさせたのではないかと想像を膨らませたのですが、いかがでしょうか。

ところで、近くに住む古老の話では、「子どもの頃、夏になると、高稲荷の崖っぷちから石神井川に向かって飛び込んで遊んだもんよ。」とのこと。いにしえの景色が偲ばれて、懐かしさで満たされます。

蛇足ながら、高稲荷神社の下の公園広場や石神井川沿道には、昭和初期に植えられたという桜が100本以上も植えられており、屋台も数多く出る花見の名所となっています。

